

. 講義について

全体として学んだこと

今回は、本当にいろいろな側面をもった教材がでてきました。そのため、いきなり全体をつかむのは難しいので、教材ごとに考えていって、そこからまとめていきたいと思えます。

(1) 『英語にとって「文法」とは何か?』を通して学びえたこと

『英語にとって「文法」とは何か?』。こんなこと考えたことがありませんでした。私は今まで、自分の目の前にある問題をただひたすらに、まるで数学の公式をそのまま使えるような問題を解いていただけでした。今まで出会ったほとんどの文法問題は、出る問題、出るパターンが同じだったので、参考書に書いてある文法事実やイディオムを鵜呑みにしていただけでした。自分が必死になって覚えていることの意味も知らず、ほとんどの知識は独立に存在して覚えています。なんて馬鹿だったのだろうと今になってやっと気づきました。でも、これに気づいたのが、教師になる前でよかったと、心の底から思います。もし気づいていなかったら、生徒に同じことをさせる確率はほぼ100%です。恐ろしい。気づいてどうするかは自分次第ですが、(ほかの教材と関連してしまいますが)『VTR:ハーバード大学学生生活』の学生たちの行動力を見習って、文法と真剣に取っ組み合いをしなければならないと決意しました。

講義の中では、記号付けの意義や方法を中心に学んで、実際の授業の中での使われ方や、記号付けを利用したプリントはどんなものなのかなどの、自分が教師になったときの記号付けの授業への応用がわからなかったので、2冊の本を読みました。『英語記号付け入門

読みの指導と英文法』と『授業はドラマだ』です。それぞれが何か示唆するものがある面白い教材をもとに、具体的な使い方や、プリントの例、生徒の反応などが事細かに載っていて、とてもエキサイティングでした。しかし、「記号付け」を使っていくと、どこかで必ずぶち当たる壁があります。私たちが今までのレポートの中で見つけてきた疑問は、同じようなものが多かったように思います。私たちのグループは、疑問を2番目に発表できるのでそんなに困りはしなかったのですが、その後のグループは「あっ！言われちゃった！」ということがあって困っていました。ぶち当たる壁は、ほとんどみんな同じなのです。

私は、このぶち当たったときこそが、一番、英文法を根本から考えることのできる素晴らしい機会だと思います。こういった機会はなかなか得られるものではありません。文を読み解くためのあるひとつの方法を使って、自分で文を分析するのと、もう書いてある法則をつかって文に当てはめていくのでは文法について考える程度がまったく違います。自分で分析をすることで、自ら疑問を作り出し、それを教師がサポートすることによって、「 $i+1$ 」の学習が可能になります。また、「記号付け」は、生徒ばかりではなく、教師にも英文法を根本から考える機会を与えます。なぜなら、記号付けプリントを作成するからです。作成すること自体も勉強になりますが、生徒からのフィードバックも自らを成長させるよい機会になると思います。生徒 教師という相互の疑問のやりとりによって、「記号付け」は生徒も、教師も共に成長させることができる方法なのです。今の私にとっても、教師になってからの私にとっても、『英語にとって「文法」とは何か?』で学んだ「英語

記号付け」は、文法を考える手段として、とても有効かつ面白い方法だと思いました。

(2)『VTR：ハーバード大学・学生たちの戦い～労働者との連携～』を通して学びえたこと

このVTRは、労働と大学生という私にとっては以外だった組み合わせが、労働について、自分の大学生生活について考える機会を与えてくれました。

アメリカは自由で豊かな国だというイメージを日本の多くの人々は抱いているように思えます。しかし、それはほんの一部でしかありません。お金がある人、お金が無い人、教育を十分に受けることができる人、十分に受けることができない人・・・こういった格差が大きすぎて、貧しい人はそのサイクルから抜け出せず、一方、富める人はより栄えるという社会です。このVTRにでてくる労働者たちの生活を見て、私は、その貧しさの程度を知りました。言葉が出ませんでした。しかし、きっともっと貧しい人がいるのだと思いました。アメリカの何が悪いのか？という疑問を通して、どこの国から何を学ぶべきなのかを調べ、そこから学んだことは、大きな収穫でした。1つの国の中で自分たちの利益だけを追いつづけ、国の利益を思いやらない政治はアメリカだけでなく、日本にもあります。それは少しずつ経済・教育など人々の生活に影響し、いつかは国全体を滅ぼすことになり得ます。もっと世界に対する自国の利益を考えた政治をすべきだと思いました。

また、学生たちの理想に燃え、他のために行動する姿はとても美しく、私に、自分に誇りを持って何かをやりきることと、学生として社会にかかわることの必要性を教えてくださいました。自分の利益だけではなく、社会全体の利益を考えた彼らの行動は、私たちみなが見習うべきことだと思いました。

(3)「変わる世界の学力マップ 21世紀の課題」を通して学びえたこと

このVTRは、私にとってとても衝撃的でした。2003年の番組であるのに、教育のあり方がここまで変わっていたということが一番の理由です。インターネットが1つの家庭にほぼ1台あるという現代。社会や経済が変われば、社会人として求められるものも自ずと変わります。当然、教育も変わる必要がでてきます。

これから親になるものとして、また、教師になるものとして、社会経済に目をむけ、自分で考える者でなければ、背中を見て育つ子供たちがリテラシーを持つのも難しいと思います。しかし、教師になった場合、1人でフィンランドの授業をやろうとするには様々な障害があります。本当に重大な危機でなければ、日本は改革を行いません。社会経済も変われば、人も変わることから目を背けず、今の体制に甘んじず、改革を恐れなくなるべきだと思いました。

(4)全体を通して学びえたこと [(1)+(2)+(3)] と新たな自分の課題

授業全体を振り返ってみて、これからの英語教育はどうあるべきなのかという展望が少し持てたように思います。また、英語教育の可能性を感じました。

先生が『英語にとって「文法」とは何か？』の中であげていらっしゃる「自分たちのちからに対する確信を育てること」と「文字を読み、情勢を分析するちからを育てること」の二つの授業の狙いは、まさに今、教育に求められているリテラシーの育成に直結してい

と思います。また、「文字を読み、情勢を分析するちからを育てる」には、英語教育だからこそできることがあります。

私が高校を卒業するまで受けてきた英語の授業は、本文を単語と文法の法則から訳すだけでした。そんな授業では、生徒は英語を学ぶ意義もわからず、意欲もわかず、自分のちからを試す場も得られず、英語は死んだ言語になってしまいます。しかし、「記号付け」のようなツールを使って、自ら英語にかかわっていくことで、その生徒にとって英語は生きた言語になります。また、その教材を訳すだけでなく、「構造読み」や感想を書かせることで、内容理解につながり、教材も英語も生徒にとって意義のあるものになります。日本は、科学リテラシーは高いが、読解リテラシーは低いといわれていますが、こう考えるとその結果は、様々な教科の読解リテラシー育成につながる側面を無視してきたことに起因するのではないのでしょうか。

つまり、これからの日本の英語教育には、読解リテラシーの育成に重点を置いた授業づくりが必要です。英語を通して他人の心情や文化を理解し、その理解から自分の考えを構築していくような授業が必要だと思います。それは、これから社会に出て行くときにも重要なことで、日本語だけでは、得られる情報の量も質も限られてしまいますが、英語でも情報を収集できれば視野は大きく広がります。このとき、画面に映し出された英文や本に書かれている英文の羅列をもし一人で読むとしても、「記号付け」と「構造読み」があれば諦めることはなくなると思います。

私たちは、無限に広がる英語と生徒の可能性を信じ、授業を通して、読解リテラシーの育成に努めなければならないというのが私の結論です。しかし、VTRを通してわかった部分もあるのですが、私はまだ読解リテラシーについてよくわかっていないことに気づきました。これでは読解リテラシーを意識した授業なんて無理にきまっています。そこで、読解リテラシーについて調べ、まとめました。(ここまでで日本語：103行)

読解リテラシー（読解力）について

(1) 読解リテラシーとは？

『図表で見る教育』によれば、読解リテラシーは次のように定義されています。

つまり、読解リテラシーとは、自分の持っている知識・能力を応用して、文章による情報を自分のものにしていくちからなのです。3つの側面が挙げられていますが、少し理解しづらいので、測定方法と共に調べてみました。

(2) PISA調査の測定内容とは？

PISA調査では、読解リテラシーを3つの側面に分けて測定します。その3つとは、『図表で見る教育』によれば次のようなものです。

) テキストの解釈：書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論したりすること。

) 熟考と評価：テキストに書かれていることを生徒の知識や考え方や経験と結びつけること。

測定は、これら3つの側面を総合的に捉えた読解力を総合読解力として各側面と区別し、評価します。

(3) PISA調査における読解リテラシーの得点分布

読解リテラシーについてはわかりました。そこで、実際、世界の国々の読解リテラシーはどのような評価を受けたかについて調べました。以下の表は2000年実施の結果です。

表1：2000年、読解リテラシーの得点分布

	総合読解力	得点	情報の取出し	得点	解釈	得点	熟考・評価	得点
1	フィンランド	546	フィンランド	556	フィンランド	555	カナダ	542
2	カナダ	534	オーストラリア	536	カナダ	532	イギリス	539
3	ニュージーランド	529	ニュージーランド	535	オーストラリア	527	アイルランド	533
4	オーストラリア	528	カナダ	530	アイルランド	526	フィンランド	533
5	アイルランド	527	韓国	530	ニュージーランド	526	日本	530
6	韓国	525	日本	526	韓国	525	ニュージーランド	529
7	イギリス	523	アイルランド	524	スウェーデン	522	オーストラリア	526
8	日本	522	イギリス	523	日本	518	韓国	526
9	スウェーデン	516	スウェーデン	516	アイスランド	514	オーストリア	512
10	オーストリア	507	フランス	515	イギリス	514	スウェーデン	510
11	ベルギー	507	ベルギー	515	ベルギー	512	アメリカ	507
12	アイスランド	507	ノルウェー	505	オーストリア	508	ノルウェー	506
13	ノルウェー	505	オーストリア	502	フランス	506	スペイン	506
14	フランス	505	アイスランド	500	ノルウェー	505	アイスランド	501
15	アメリカ	504	アメリカ	499	アメリカ	505	デンマーク	500
16	デンマーク	497	スイス	498	チェコ	500	ベルギー	497
17	スイス	494	デンマーク	498	スイス	496	フランス	496
18	スペイン	493	リヒテンシュタイン	492	デンマーク	494	ギリシャ	495

19	チェコ	492	イタリア	488	スペイン	491	スイス	488
20	イタリア	487	ポルトガル	483	イタリア	489	チェコ	485
21	ドイツ	484	ドイツ	483	ドイツ	488	イタリア	483
22	リヒテンシュタイン	483	チェコ	481	リヒテンシュタイン	484	ハンガリー	481
23	ハンガリー	480	ハンガリー	478	ポーランド	482	ポルトガル	480
24	ポーランド	479	ポーランド	475	ハンガリー	480	ドイツ	478
25	ギリシャ	474	ポルトガル	455	ギリシャ	475	ポーランド	477
26	ポルトガル	470	ロシア	451	ポルトガル	473	リヒテンシュタイン	468
27	ロシア	462	ラトビア	451	ロシア	468	ラトビア	458
28	ラトビア	458	ギリシャ	450	ラトビア	459	ロシア	455
29	ルクセンブルグ	441	ルクセンブルグ	433	ルクセンブルグ	446	メキシコ	446
30	メキシコ	422	メキシコ	402	メキシコ	419	ルクセンブルグ	442
31	ブラジル	396	ブラジル	365	ブラジル	400	ブラジル	417
	(日本は2位グループ)		(日本は2位グループ)		(日本は2位グループ)		(日本は1位グループ)	

日本は、解釈の得点は低いものの、総合読解力においては、2位グループに位置し、比較的高い読解力を示しています。フィンランドは群を抜いて高い成績を修めています。

この結果は2000年のものですが、PISA調査は3年ごとに行われるため、2003年の結果も調べてみました。

表2：2003年、読解リテラシーの平均得点分布

1	フィンランド	543	21	ドイツ	491
2	韓国	534	22	オーストリア	491
3	カナダ	528	23	ラトビア	491
4	オーストラリア	525	24	チェコ	489
5	リヒテンシュタイン	525	25	ハンガリー	482
6	ニュージーランド	522	26	スペイン	481
7	アイルランド	515	27	ルクセンブルグ	479
8	スウェーデン	514	28	ポルトガル	478
9	オランダ	513	29	イタリア	476
10	香港	510	30	ギリシャ	472
11	ベルギー	507	31	スロバキア	469
12	ノルウェー	500	32	ロシア	442
13	スイス	499	33	トルコ	441
14	日本	498	34	ウルグアイ	434
15	マカオ	498	35	タイ	420
16	ポーランド	497	36	セルビア・モンテネグロ	412
17	フランス	496	37	ブラジル	403
18	アメリカ	495	38	メキシコ	400
19	デンマーク	492	39	インドネシア	382
20	アイスランド	492	40	チュニジア	375

2000年と2003年を比べると、日本は大幅に順位が下がっていることがわかりました。こんなにも下がってしまった原因はどこにあるのでしょうか？

(4) 日本の読解リテラシーの世界順位低下の原因についての分析

日本は、(3)での表を参考にすると、2000年の平均は522点(2位グループ・8位)、2003年の平均は498点(3位グループ・14位)で、3年のうちに得点がマイナス24、順位が6つ下がるという結果でした。原因を様々な側面から探っていきたいと思います。

● テキストのタイプ

PISA調査の読解力テストには様々なテキストのタイプの問題があります。2000年と比較して、こういったタイプの問題でつまづいたのでしょうか？

表3：テキストのタイプ別の正答率

	合計	テキストのタイプ							
		解説	物語	書式	表	地図	図	図・グラフ	記述
全体問題数	28	12	3	3	4	1	1	1	3
経年変化で正答率が下がった問題数	20	9	2	1	3	0	1	1	3
%(当該問題数/全体問題数)	71.4%	75.0%	66.7%	33.3%	75.0%	0.0%	100.0%	100.0%	100.0%
前回との差が5%以上	10	4	0	1	2	0	0	0	3
%(当該問題数/全体問題数)	35.7%	33.3%	0.0%	33.3%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
OECD平均より正答率が低い問題数	13	7	3	0	2	0	1	0	0
%(当該問題数/全体問題数)	46.4%	58.3%	100.0%	0.0%	50.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
OECD平均との差が5%以上	6	4	2	0	0	0	0	0	0
%(当該問題数/全体問題数)	21.4%	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

上の表をみると目につくのが、「解説」「物語」タイプの問題です。「表」や「図」も悪くないとはいえませんが、OECD平均との差が5%以上ではないことを考慮すると、「解説」「物語」タイプの問題が大きな改善課題だと思います。

● 読解のプロセス

次は、読解するときに受験者が使うプロセスごとの分析をみてみます。

	合計	読解のプロセス
--	----	---------

		熟考・評価	解釈	情報の取り出し	解釈・情報の取り出し
全体問題数	28	7	14	6	1
経年変化で正答率が下がった問題数	20	4	11	5	0
%(当該問題数/全体問題数)	71.4%	57.1%	78.6%	83.3%	0.0%
前回との差が5%以上	10	1	6	3	0
%(当該問題数/全体問題数)	35.7%	14.3%	42.9%	50.0%	0.0%
OECD 平均より正答率が低い問題数	13	3	9	1	0
%(当該問題数/全体問題数)	46.4%	42.9%	64.3%	16.7%	0.0%
OECD 平均との差が5%以上	6	1	5	0	0
%(当該問題数/全体問題数)	21.4%	14.3%	35.7%	0.0%	0.0%

上の表から、「解釈」と「熟考・評価」をつかった問題の成績が特に芳しくなかったことがわかります。

● 出題形式

出題形式において正答率は、どんな傾向をしめしているのでしょうか？

	合計	用途・状況				
		自由記述	多肢選択	多肢選択・複合	求答	短答
全体問題数	28	10	9	1	4	4
経年変化で正答率が下がった問題数	20	7	7	4	2	3
%(当該問題数/全体問題数)	71.4%	70.0%	77.8%	100.0%	50.0%	75.0%
前回との差が5%以上	10	4	2	1	1	2
%(当該問題数/全体問題数)	35.7%	40.0%	22.2%	100.0%	25.0%	50.0%
OECD 平均より正答率が低い問題数	13	5	6	0	1	1

%(当該問題数/全体問題数)	46.4%	50.0%	66.7%	0.0%	25.0%	25.0%
OECD 平均との差が5%以上	6	3	3	0	0	0
%(当該問題数/全体問題数)	21.4%	30.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%

上の表から、「自由記述」と「多肢選択」の正解率が特に低かったことがわかります。また、問題形式別の無回答率で「自由記述」を調べると、OECD平均より無回答率が低い問題数が10問中8問で、前年度よりも60%無回答率が増えています。

これらをまとめて考えてみましょう。

読解リテラシーで特にちからをいれて取り組むべきなのは

- * 「解説」と「物語」タイプの問題
- * 「解釈」と「熟考・評価」のプロセスをつかった問題
- * 「自由記述」と「多肢選択」形式の問題

の3点だとわかりました。つまり、

- * 「解説文」や「物語文」を通して、
- * 「自らの目的に応じてテキストの意味や構成を理解したり、筆者の表現意図を解釈したりするちから」や、「与えられたテキストについて主張の信頼性や客観性、引用や数値の正確性、論理的な思考の確かさ、妥当性など、様々な幅広い観点から評価しながら読むちから」を使い、
- * 「自由に自分の考えを書く」

が必要になります。

(5) 分析結果を英語に当てはめた場合

次は、(4)での分析結果を英語に当てはめて、英語の中で2003年特に弱かった読解リテラシーを育成するためには、どんな条件が必要なのか考えてみたいと思います。

- * 「解説文」や「物語文」を通して、

英語を1文1文ずつ問題にするのではなく、意味のある1つのテキストを通して、

- * 「自らの目的に応じてテキストの意味や構成を理解したり、筆者の表現意図を解釈したりするちから」や、「与えられたテキストについて主張の信頼性や客観性、引用や数値の正確性、論理的な思考の確かさ、妥当性など、様々な幅広い観点から評価しながら読むちから」を使い、

目的を持って文章の意味や文法構造を理解し、筆者の表現意図や文章の内容を解釈したり、その解釈から文章に対して評価をすることができ、

- * 「自由に自分の考えを書く」

その理解・解釈・評価などを自分の言葉で自由に書くことを授業で実践しなければなりません。

(6) 具体的にどんな授業作りにすればよいのか？

(5) で考えたことをまとめると、

今後の英語教育では、英語を1文1文ずつ問題にするのではなく意味のある1つのテキストを通して、自ら目的を持って文章の意味や文法構造を理解し、筆者の表現意図や文章の内容を解釈し、その解釈から文章に対して評価をすることができ、その理解・解釈・評価などを自分の言葉で自由に書くことを通して読解リテラシーを育成することが重要だ。

ということになります。では、これを実際にクリアするためにはどんな授業づくりをしていけばいいのでしょうか？

まずは、何か考えるべき題材が含まれている解説文や物語文を選ぶことから始まります。そして教師は、授業ごとにその文章から読み取るべきこと(目的)をはっきりさせます。文を読んでいく時、生徒が自ら訳に取り組むべきで、教師は補助者です。こうして文章の意味や文法構造を自らのちからで理解し、そこから筆者の表現意図や文章の内容を解釈します(この部分は物語の中で起承転結のどの部分にあたるのか、なぜ筆者はこのような表現をしたのかなど)。そして、生徒はこれらの読み取りを通じて、その授業の目的について感想や論文を書きます。このとき、一般論だから・・・というのではなく、一般論を批判的な目で見ること重要であり、みな意見に振り回されず自分の意見をちゃんと主張して、それをみんなにわかてもらえるようにするという指導も大切です。そういった雰囲気がないと、意見の対立に乏しく、そのためにお互いの異なった意見・考え方・価値観をわかり合える機会が少なくなってしまいます。

こういった授業をしていけば、英語の文章の仕組みをおのずと理解できます。私がパラグラフリーディングを知ったのは高校2年生のことでした。進研ゼミをとり始めた時期です。その英語のテキストの中で毎月パラグラフリーディングについての特集がありました。その効力にすごく感動して、まじめに進研ゼミの問題集をやらない私が英語のその特集の部分だけは欠かさず毎月やって、見直して、といったことをしていました。なんで誰もこんなに便利な読み方を教えてくれなかったんだろう！とか、なんで今まで最初の文から最後の文までまじめに読んでいたんだろう！と本当に悔しく思いました。しかし考えてみれば、日本語も英語も言語であり、それまでに私が受けてきた国語の授業での文章のように英語も段落や起承転結があるのは当たり前でした。私は、日本語と英語をまったく別次元のものだと思っていたのです。

日本語と英語は、『英語にとって「文法」とは何か?』にあるように「前置修飾 VS ほとんど後置修飾、従節+主節 VS 主節+従節・・・」と語順に関して逆の構造をもっているが、いったん文章となれば日本語も英語も同じです。この2つを分離させるのではなく、共通の何かを持っているものとしてお互いに関わらせて教えていくのが読解リテラシーのいくせいにもつながるのではないのでしょうか。

(7) まとめてきて強く感じたこと

(5)(6)を書きながら、私は「記号付け」と「構造読み」を思い浮かべた個所がたくさんありました。本当にたくさんあるので、書き出すのは難しいのです。きっとこれは「記号付け」が大いに役立つのではないかとか、これって「構造読み」のこと？とか何回も思いました。今回、読解リテラシーについて調べてみてとてもよかったと思っています。

今後の英語教育がどうあるべきかについて、考察することができ、「記号付け」と「構造読み」の有効性も再確認できました。いろいろな要素が絡み合って、自分の中で意味を持って結びつき、「あっ！」という発見や、「えっ？」という疑問につながっていく先生の授業はまさに読解リテラシーをバンバン使っているように思います。

とても面白かったです！ありがとうございました！

英文要約

I used to study English though I didn't know meaning of what I memorized. And, I memorized anything that was independent of other knowledge. But I met "kigou-zuke" and "kouzou-yomi". We can deliberate about root of grammar by using it. And, we can analyze sentences for ourselves by using it. It enables us to study <I+1>. So, we can exchange questions mutually. That is to say, "kigou-yomi" can bring up not only students but also teachers. And it can bring up student's confidence and power of analyzing information. But, recently, result of PISA2003 showed Japanese students (15 years-old) have low reading power. Their weak points of reading power were ability of reading texts, understanding content of texts and writing down own opinion. I found "kigou-zuke" and "kouzou-yomi" can be effective in solving these problems inclusively. "Kigou-zuke" gives us ability of analyzing. And "Kouzou-yomi" gives us understanding structure of texts. They can bring up reading power with joy.

(日本語：103()+130()行 英語：11行)

参考文献・参考HP

- 『授業はドラマだ』
寺島隆吉監修 野澤裕子著 あすなろ社出版
- 『英語記号付け入門 読みの指導と英文法』
寺島隆吉編 英語記号付け研究会著
- 『図表で見る教育』OECD インディケータ（2004年版）
OECD 編著 明石書店出版
- 文部科学省 HP：PISA 調査（読解力）の結果分析と改善の方向
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05020801/028.htm